決算審査特別委員会視察報告書

【令和５年１０月１３日】

視　察　日　令和５年１０月１１日（水）

視 察 地 及 び 班 編 成

第 １ 班

・視察地　誠之小学校仮設校舎／目白台運動公園
・班　長　たかはま なおき 委員
・班　員　松平 雄一郎 委員、浅川 のぼる 委員、関川 けさ子 委員、海津 敦子 委員、高山 泰三 委員、高山 かずひろ 委員

第 ２ 班

・視察地　神明都電車庫跡公園／だんござかホーム
・班　長　市村 やすとし 委員
・班　員　名取 顕一 委員、小林 れい子 委員、上田 ゆきこ 委員、松丸 昌史 委員、西村 修 委員

第 ３ 班

・視察地　大塚地区地域生活支援拠点／小石川育成室
・班　長　石沢 のりゆき 委員
・班　員　豪一 委員長、品田 ひでこ 委員、岡崎 義顕 委員、宮野 ゆみこ 副委員長、田中 香澄 副議長

視 察 報 告 内 容

第 １ 班

１　誠之小学校仮設校舎

令和４年度に仮設校舎の建設工事が行われた誠之小学校を視察した。誠之小学校は、開校148年という長い歴史を持ち、現在では英語教育にも力を入れている。新校舎は、令和６年１月から使用開始の予定。また、校庭整備工事も令和６年２月に始まり、令和６年６月から使用が開始される予定である。

視察した仮設校舎は、新校舎竣工までの教室不足に対応するため、２教室を増設したものである。トイレ、空調は整備され、耐震等の安全性は確保されていると確認したが、教室やロッカーにゆとりが無く、災害時の避難通路となる廊下に荷物が置かれている状況であった。子どもたちの指導が行き届くよう机が二個で一列となる配置とし、収納を十分に確保すべきである。

工期を優先したため断熱性には課題があり、今年の猛暑の間も冷風機等を配置することで対処してきたとのことだが、子どもたちの健康を最優先に断熱性を確保していただきたい。

今後の学校増改築に当たっては、児童数の見込みに余裕を持たせることでゆとりのある設計施工に取り組んでいただきたい。

２　目白台運動公園

目白台運動公園は、2009 年開園、約３万平方メートルの敷地を擁しており文京区の中では最大の面積を有する公園である。自然の中を散策する他にも、フットサルコート・テニスコート・多目的広場・芝生広場・わんわん広場なども整備されており、様々なニーズに合わせて楽しむことができる公園である。

駐車場は、インターロッキング舗装で整備され、駐輪場も今までピーク時はあふれていた自転車が通行の支障にならないよう対処されたことを確認した。

一部傷んでいた芝生は、養生期間を設ける等の対処により、現在では良好な状態を保っていた。

普段は入れないよう施錠されている斜面地に入り、議会でも指摘があった土砂の改善状況を確認した。文京区においては、貴重な雑木林ではあるが、一方で様々な植物が生い茂っており上から下まで見通せない状況となっている。遊歩道の整備を含め、安全管理には改善すべき点があり、区民が気軽に入れる散策路とするには解決すべき課題がある。残すべき樹木、伐採すべき樹木を判断し、安全な遊歩道を再整備することで、区民が安心して通行できるよう適切に管理をしていただきたい。

第 ２ 班

１　神明都電車庫跡公園

令和３年10月１日から始まった神明都電車庫跡公園の再整備は、総工費約３億３千万円をかけ、令和５年２月にリニューアルオープンした。長年地元住民の悲願であった都電車両の修復に加え、新たに屋根とプラットホームも設置し、都電車両内も月２回開放することで、都電の歴史を広く利用者にも伝承することができ、都電を身近に感じることができた。また、文京区初のインクルーシブ遊具を砂場、ブランコ、じゃぶじゃぶ池に設置し、区内でも特色のある公園に生まれ変わった。

さらに防災機能としては、耐震性に優れた旧神明町都電車庫をイメージしたレンガをモチーフとした外壁のトイレ、かまどベンチ、井戸を利用した手押しポンプ等も完備し、また、防犯カメラも４台設置するなど、利用者の安全・安心に配慮されていると感じた。

じゃぶじゃぶ池については、８月下旬をもって利用終了としたが、子どもたち、利用者のことを考え、９月にも延長するなど柔軟な対応をしていただきたい。また、砂場の安全性の確保と衛生面に配慮したフェンスは、今後の再整備の参考にしていただきたい。

今回の公園再整備は、再整備前より地域住民の声を丁寧に聞き、意見交換会でも活発な意見がしっかり反映され、再整備に生かされたものと評価したい。

連日、利用者でにぎわい、憩いの場となっている今回の再整備を、今後の公園再整備の参考にしていただきたい。

２　だんござかホーム

令和４年度、文京区千駄木に開設された障害者グループホーム「だんござかホーム」（株式会社津知弥）を視察した。「だんござかホーム」は建物の建て替えをきっかけに新設され、１、２、３階は従前から運営していた通所施設「だんござかハウス」（20名）に、５、６、７階は障害者グループホーム「だんござかホーム」（６名＋短期入所１名）となっている。株式会社津知弥は、台東区においても通所施設を運営しており、施設整備に当たっては、文京区からの補助は受けず、借り入れ等で対応し、利用者は文京区民及び他区民とした。コロナによる工期の遅れや、その後の物価高騰があり、物価高騰前だからこそ建て替えが可能だったと代表の土屋氏は語る。文京区からは、防犯カメラや柵などの設置補助を受けることができた。

代表の土屋氏が障害者グループホームをつくることになったきっかけは、重度知的障害を抱える弟の存在があったためで、障害のある子を抱える母の「自分の子より１秒でも遅く死にたい」という言葉も背中を後押し

した。今、文京区においても、障害者の家族の皆さんは、親亡き後に入所できる障害者グループホームの設立を切望している。「だんござかホーム」をはじめ、地域に根差した障害者グループホームの運営に当たっては、文京区からのさらなる側面からのサポートが望まれる。

第 3 班

1　大塚地区地域生活支援拠点

令和４年 11 月に開設した水道２丁目の大塚地域生活支援拠点は、社会福祉法人文京槐の会に区が運営を委託しており、常勤スタッフ２人と非常勤スタッフ１人で運営している。障害のある方の「相談」と「地域の体制づくり」の２つの機能を担っている。

サロンスペースを地域に開放し「地域の方と障害のある方との接点を持てる場にしたい」方針を掲げ、これからはキッチンを活用したり、スマホ教室を実施するなどし、地域とのつながりを強めることが期待される。

地域生活支援拠点の認知度は高まっており、大塚地域生活支援拠点は、月平均 300 件ほどの相談に親身に対応している。障害のある子どもの親の高齢化や、親亡き後の施設などの相談、精神疾患のある親をケアする家族の相談など多岐にわたっている。

課題は、緊急時の受け入れ先の相談においては、紹介だけでなく施設への受け入れまでの支援を完結されたい。また、ハードとソフトの整備に加えて、障害のある人に対する地域の方の理解も課題となっている。

障害のある方を地域全体で支えるサービス提供体制を構築することを目的にする機関なので、地域の方の力を借りてその目的を達成されるよう努力されたい。

2　小石川育成室

令和５年４月に開設された小石川１丁目再開発ビル内の小石川育成室は、区内で５か所の育成室を運営する株式会社セリオに区が運営を委託している。

広さ 134 ㎡で、児童の保育スペースは 77.3 ㎡となっており、児童一人当たりの広さは 3.092 ㎡で基準を満たしている。定員 25 人に現在 20 人の児童が在籍しており、学年ごとでは１年生 16 人、２年生２人、３年生２人。児童の在籍する学校は柳町小（15 人）、指ケ谷小（２人）、駒本小（２人）、礫川小（１人）となり、複数の小学校児童を受け入れている。室内にはシャワー室も完備されている。

子どもたちの希望に合わせ室内ではあるがドッジボールや大縄跳び、３歩当てなどの遊びも行われている。子どもたちが主体的に室内にハロウィンの飾り付けなどを行なったり、礫川公園や清和公園で外遊びもされている。

長期休暇中も８割の児童が通室している。学習時間やプログラムも工夫され、指導員の努力が見られた。親の働き方や退室時間も多岐にわたるが、送迎対応もきちんとこなしている点は評価する。

今後は「文京区待機児童解消加速化プラン」の実践を図り、育成室の増室などにより待機児童解消に努めていただきたい。